

## 生薬学と生薬雑学

### 1. 生薬とは

日本薬局方の生薬総則には、「1 医薬品各条の生薬は、動植物の薬用とする部分、細胞内容物、分泌物、抽出物または鉱物などであり、生薬総則及び生薬試験法を適用する生薬は次のとおりである。-略- 2 生薬は、通例、全形生薬、切断生薬または粉末生薬に分けて取り扱う。全形生薬は、その薬用とする部分などを乾燥し、または簡単な加工をしたもので、医薬品各条に規定する。」と記述されている。

この部分をより簡便に記述すると、生薬は、「動植物をそのまま、もしくは乾燥などの簡単な加工を加えて医薬品としたもの」と定義される。

### 2. 学名と命名者

学名とは、生物につけられた世界共通の名称で、植物の場合、「国際植物命名規約」にその命名法が定められている。

種の学名(種名)は属名+種小名で構成され(2名法)、通常イタリック体(斜字体)で表記されている。属名の頭文字のみ大文字、他はすべて小文字で表記する。

ケシ科 ケシの花



例) ケシ(芥子、罂粟)

*Papaver somniferum* L.

属名

種小名

命名者

ケシの成分の「モルヒネ」は鎮痛剤に利用されている。

\* ケシはアヘン法により一般の栽培が厳しく規制されている。

### 〈生薬の基原植物の命名者となった植物学者〉

学名での略号

リンネ Carl von Linne L.もしくはLinn.



カール・フォン・リンネは、スウェーデン南部のステンブーフルトで牧師の子として生まれる。ウプサラ大学で医学部教授となり、医学・植物学・薬学を教え、またウプサラ大学の植物園の園長を務めた。それまでも、様々な形で植物を分類する試みがなされたが、リンネは分類の基礎として、植物の生殖器官である花の雌蕊(めしべ)と雄蕊(おしべ)に着目し、雌蕊の数で「綱」を分け、その中をさらに雄蕊の数で「目」に分けるという体系化を行なった。さらに、二名法で全ての生物を表記する学名表記を提唱し、自らありとあらゆる植物・動物に学名を付けていった。

(命名例)

オオバコ *Plantago asiatica* L. セネガ *Polygala senega* L. その他多数

### 3. 生薬雑学



#### 【ナツメの葉の味覚修飾物質】

クロウメモドキ科 ナツメ



#### 噛んだらチョコレートの味がしなくなる!?

ナツメの葉を、1~2分間かんだ後に、砂糖や、果糖、ブドウ糖を含む食物を食べても甘みを感じない。ステビオシド(ステビアの葉の甘味物質)や、アスパルテーム等の甘味料でも同様である。一方、他の味覚には何ら影響がない。これはナツメの葉に含まれる**ジジフィン**という物質が、味蕾の甘味受容体を選択的に阻害しているためである(甘味物質そのものに対して作用しているわけではない。)このように味覚の受容体に結びつき、味覚を変化させる物質を総称して、「**味覚修飾物質 taste modifier**」と呼んでいる。

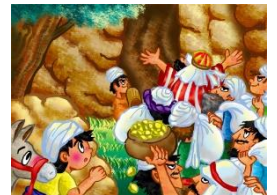
#### 【「開けゴマ!」はなぜ「ゴマ」なのか?】

ゴマ科 ゴマの果実



『アラビアンナイト』の中の「アリババと40人の盗賊」に出てくる、秘密の洞窟の扉を開ける呪文が「開けゴマ!」であることは有名。しかし、なぜ「ゴマ」なのか?

ゴマの実が熟してつまった時に、まるでホウセンカの実のようにはじけて開くため、財宝の詰まった洞窟を開く言葉として用いられたのではないかと考える説もある。



#### 【ジャスミンの香り、それとも悪臭? インドール】

アカネ科 クチナシの花



クチナシの学名 *Gardenia jasminoides* は、「ジャスミンのような」という意味がある。ジャスミン(モクセイ科ソケイ属の植物の総称)は分類学的に近縁ではないが、どちらの花も独特の甘い香りがする。クチナシの香りの成分は、酢酸ベンジルやリナロール等多数が含まれているが、クチナシとジャスミンに共通する成分として「**インドール(indole)**」がある。インドールは、防虫剤くさい臭気をもち、「糞便」や「口臭」のにおいの原因の一つともなっている。しかしこの悪臭成分も、希釈し低濃度では、何と新鮮な花の甘い香りとして感じる。同じ香りの成分でも空気中の濃度で違った印象を与えることはしばしばあり、また嗅覚は個人差も大きい。余談だが、漢字で「匂い(におい)」と書けば良い香り、芳香を指すが、「臭い(におい)」をいう字をあててしまうと「悪臭」になってしまう。しかも「臭い」は「くさい」とも読める。言葉の上でも芳香と悪臭は紙一重である。

ちなみに、インドールに酢酸が付いた**インドール酢酸(iodoleacetic acid)**は植物の生長や、環境への応答、開花にかかわる重要な植物ホルモン。非ステロイド性抗炎症薬のインドメタシンも、インドール誘導体である。

インドール(左)と  
インドール酢酸(右)

